



## モンゴルの環境問題の現場で活動する NGO/NPO

ライター Mitsuko Kanzaki  
神崎美津子

筆者は、1993年～2006年までモンゴルで暮らした関係で、モンゴル間の市民レベルでの環境協力に関する紹介記事をOECCから依頼された。そこで、モンゴルでの環境活動に従事しているNGO/NPO等への取材から得られた主催者方の生の声を紹介したい。

### 公害のない開発を目指してNGO活動ははじめた

今回の取材に当たり、モンゴルの資本主義体制への移行期に集めた資料を探っていくと、1991年5月1日付の朝日新聞に環境協力に関する記事を見つけた。生協組合の役員らが、オチルバト初代大統領に「公害のない開発のために日本の経験や情報を教えてほしい」と強く要請されたことをきっかけに、「日本・モンゴル文化経済交流協会」を設立し、せっけんのミニプラントを寄贈し、日本の環境保護を伝えていく活動を始めたことである。

同協会はその後せっけん製造技術の移転を行い、現地では複合せっけんの製造がモンゴル側の手で続けられている。同協会では、その後、毎年ウランバートル市内を中心に植林を続けてきた。

「19年間やり続けているが失敗も多い。原因は自然環境問題もあるが、せつかく木を育てた土地に建物が建つと言う人災もある。文化が違う。生活する自分たち、とくに子供世代が緑を育て上げるという意識を高めていくシステム作りが大切だと実感しています」と佐藤紀子協会会長。協会では失敗例を生かして成功例に転じるよう今後も植樹を続けてゆく。

### 日本留学経験のあるモンゴル人とともに

非営利団体GNC Japan (Global Network for Coexistence Japan) とモンゴルの出会いは、大学院生だった宮木いっぺい代表らが、日本ができる国際貢献とは何かを探っていたとき、偶然目にしたモンゴルの森林・草原火事のニュース。1996年「木を植えるだけなら自分たちでも出来る」とモンゴルを訪れ、人々の笑顔や大草原の素晴らしさに惹

かれ、モンゴルで活動することを決めた。鳥取大学乾燥地研究センターなど様々なところで話を聞いていく中で、「安易に木を植えてはいけない」ことを知り、農場の防風林など安心して木を植えられる場所からはじめた。「そこにいる人たちにとって、本当に役立つことは何だろうと常に考えていました。そして信頼できるカウンターパートが見つかるまでは本格的な活動は始めないと決めていました」手探りでモンゴル人の専門家や研究者、若者たちと巡り会い、意見を聞きながら一緒に学んでいく中で、活動は広がっていった。

現在は、1) セレング県、トゥブ県での森づくり、2) 中・高校生が植林や農業体験を行うエコ教室(課外環境授業)の実施、3) 2002年から協働で作りはじめ、2005年に開園したモンゴル国立大学エコロジー教育センターのエコ植物園の整備、4) 音楽舞踊学校の庭園造り、5) 植樹用の苗畑づくり、6) セミナー、シンポジウムの開催、7) アニメ「木を植えた男」(モンゴル語版GNC翻訳)の上映会開催、8) 環境教育ポスターの作成、配布など行っている。モンゴル人の専門家、ウランバートルに住む学生、日本に留学していて里帰りしているモンゴル人学生たちが中心的に活動に参加している。「エコツアーやエコ教室など毎年定期的にやっていく中で、彼ら自身の問題意識を高めていくこと、モンゴル人同士が出会ってつながっていくこと、継続的に活動していくことを重視しています」

特筆すべきことに、日本に留学経験のある若者がGNCモンゴルを立ち上げ、2007年にはモンゴルのNPO法人として認可されるに至っている。また、エコツアーに参加した若者が、自分たちでグループを作って緑化運動を始めたという。「GNCが木を植えるといってもその規模は小さい。でもエコ教室に参加した子どもたち若者たちが大きくなったとき何かを始めてくれれば、その輪が広がったことになります」



モデル農場でのエコ教室。  
挿し木栽培したポプラを防風のため植樹（2008年9月）

### 多くの情報を集約・公開していく新たな試み

びわ湖・フブスグル湖交流協会は、モンゴル・湖・環境・国際協力をキーワードに1999年に設立されたNGO団体。フブスグル湖及び周辺の科学的調査とそれらの情報発信、火災被害にあった森林の復活再生、森林虫害の被害状況報告と跡地再生、野生動物の生態調査などを積み重ね、他方、湖畔のハトガル村での環境教育支援、美化活動などを行っている。これらの活動の人的・学術的交流から生まれた2006年設立のNPOモンゴルエコフォーラム(MEF)では事業の一つとして「持続可能な観光開発の実戦事業」として取り組み、周辺の廃棄物調査や廃棄物に対する住民の意識調査を進めている。モンゴルの主要観光地の一つであるフブスグル湖周辺には、キャンプ地が多く、廃棄物の適正な処理が求められているからだ。中川道子事務局長は、各家庭からのゴミを少なくすること、分別するなどの啓発活動からはじめており、このシステムがフブスグルでうまくいけば、モンゴルの他の地域に広げていきたいとしている。

モンゴルエコフォーラムは、モンゴルの環境・環境問題を研究対象としている科学者、研究者の



第6回MEF総会およびシンポジウム「モンゴルの環境は今」は、駐日モンゴル国大使館で開催。（2009年6月）

フィールド調査の内容・成果を集約し、互いの情報交換・公開する場として2006年に立ち上げられた特定非営利活動法人である。植林などの環境活動事業を実施しているNGO・NPO法人等が、公開された情報を活用して現場での問題解決の助けとすることを目指し、また、各団体が個々でやっている事業、研究を集約して環境協力全体をみることで、両国政府などに働きかけをしていくことも視野に入れている。「小さいことの積み重ねを大きなことに結びつけていきたい。まだまだこれからです」と中川事務局長は語る。

### 子どもたちの心に植えられた木が実るのはこれから

モンゴルの環境にはゾド（冷雪害）、早ばつ、草原・森林火事などの天災が大きなダメージを与えている。他方、資本主義経済化による家畜や土地の私有化から、土地の荒廃、廃棄物の増加が起こり、近年では、金の露天掘りや永久凍土までに及ぶ掘削による鉱業開発など人的ダメージが波のように次々と襲ってきている。取材の中で「苗木より買ってほしいものがある」「金にならない環境をするよりもビッグビジネスをした方がいい」とモンゴル人スタッフが親戚に言われた」などの話がでてきていた。環境問題と経済は切り離せない。金銭的にはけして潤沢でないNGO/NPOではあるが、その経済開発の大波の中で、住民、若者、子どもに手を携えるという最も近いアプローチができる強みをもっている。モンゴルの環境問題に地道にひたむきに取り組む主催者方の姿が印象的だった。

モンゴルが民主化され、日本との交流が盛んになり始めてから18年。高度経済成長期から公害や汚染と向き合い、削減してきた日本の経験、両国研究者による科学的・人文的知見、NGOなど市井の人々同士のネットワークや現場での体験が生かされて実をつけていくのは、まさにこれからである。

#### ●日本モンゴル文化経済交流協会

<http://www.mongol.or.jp/kyokai/>

#### ●GNC Japan (Global Network for Coexistence Japan)

<http://www.kyouzon-gnc.com>

#### ●びわ湖・フブスグル協会

<http://www.biwa.ne.jp/~michikon>

#### ●モンゴルエコフォーラム

<http://www.npo-mef.org>

\*OECCHP (URL: <http://www.oecc.or.jp>) にてモンゴル環境問題に取り組むNGO/NPO等のリストを掲載。